

【研究ノート】

伊勢神宮における鳥名子舞

今 由 佳 里

はじめに

伊勢神宮の歴史は古く、2000年以上の歴史を遡ることができる。その間、神宮では様々な儀式が執り行われてきた。そこには、祭祀に付随する音楽が数多くあり、御神楽^{みかぐら}はその代表的なものといえよう。明治4年の神宮大改革によって、神域に神楽殿が造営され宮廷の神楽が採り入れられた。そのことによってそれ以前伊勢神宮に伝えられてきた神楽鳥名子^{と な ご ま い}舞は多くの人々の記憶から葬り去られることとなった。鳥名子舞は、明治6年6月19日付で神宮司庁から廃止を宣告された。しかし、その歴史を遡れば1200年という長い時間を有する皇大神宮（内宮）・豊受大神宮（外宮）における神楽舞であったのである。

本稿では、鳥名子舞について先行資料を基にその概要について整理したい。

1. 鳥名子舞の沿革

前述したように、鳥名子舞は1200年という神宮の歴史の半分以上を占めている貴重な舞である。鳥名子舞の最初の記述は、804年の『儀式帳』に見られる。それは、鳥名子舞に際し鳥名子料を給したという記録である。その後の『延喜式（905）』においても、鳥名子舞奉仕者へ青摺衣装などの料布に関することが記されており、古くから神宮に奉納されていた神楽舞であることがわかる。この舞の起源は、天岩戸の前で鶏を鳴かせながら舞い踊ったアメノウズメノ命の歌舞であったとも、伊勢の風俗舞であったともいわれている。なお、鳥名子の名義に関しては諸説が見られるが、この天岩戸の故事に基づく「常世の長鳴鳥に擬して舞う」という説が有力とみなされるであろう¹。古代には「鳥子名」

という名での記録も残されている。

『外宮今式』には「鳥名子、七歳から十四五歳に至るもの七八人、故障ありて、即ち四五人來り勤む（後略）」と記載されている。また『神宮諸雜事記』には、舞奉仕の童について「七歳から十四歳までの童子七人」とする記録が残されている。さらに近年編まれた『神宮を中心としたる御神楽を偲ぶ座談会』²では、幼い頃鳥名子舞を舞った舞人が、「『ひよこ』は十が一番大きく、大抵は六つ位でした。各字に十六七軒宛ある鳥名子組の中から交替に選ぶのですが、一字で四名揃へるのはむづかしかったものです」³と答えている。これらのことから、鳥名子の年齢構成は、その時々々の鳥名子組に属する童子の年齢に拠るところが大きく、凡そ6歳から15歳の童子によるものであったといえる。しかし、鳥名子の幼さから儀式の静肅さに欠けるという苦情が神宮から出されたという記録もあり、10歳未満の童子は今後連れてこないという『詫状一札』を認めたという経緯も残っている⁴。

なお、鳥名子舞は俗に「ひよひよ舞」或いは「ひよひよ神事」とも呼ばれた。これは、歌曲にあわせて「ひよひよ」と唱えながら舞ったためという説や、笛生の吹く竹笛の音が「ヒヨヒヨ」と聞こえることからという諸説が見られる⁵。なお、鳥名子舞において舞を担当した童子を「ひよこ」と称していた。

この舞の奉納は、明治6年6月19日に神宮司庁から鳥名子総代への「鳥名子廃止之事」という達しによって終わりを告げた。

2. 鳥名子組

三重県度会郡玉城町には、かつて山神・積良・矢野・野篠・蚊野・東原という村があり、ここには、神宮の三節祭（神嘗祭と六月と十二月の月次祭）と遷宮に際して鳥名子舞を奉納する鳥名子組があった。この鳥名子舞を奉納する家柄は、世襲されていた。また、鳥名子組の束縛は強く、長男以外の養子先、娘の嫁ぎ先に至るまで、鳥名子組内で縁談がとりまとめられていた。鳥名子組は、神役人とも称し、高い身分を有していた。また、鳥名子組へは、神事料として鳥名子田が与えられ経済的に相当な庇護を受けていた。しかし乱世とともに鳥名子田は失い、その身分は保証されぬようになっていく。

廃絶直前の鳥名子組の身分に関して、興味深い記録がある。それは、その当時に鳥名子舞を勤めていた鳥名子の言によるもので「宮川を渡る時、大水が出て居ても、鳥名子組だと云ふと船を引き戻して乗せてくれるほど威勢がありました（増田三治郎：度会郡外城田村蚊野）」「挟箱には『太一御用』の門が置いてあるので、どんな大水でも乗せてくれたのです（西野武市：度会郡外城田村東原）」という発言の記録である。このことによって、この当時には既に身分の回復がなされていたことが示唆される。

3. 鳥名子舞の次第

伊勢の神宮では、神事芸能として行われる神楽として倭舞・五節舞・鳥名子舞があった。『建久年中行事』には、「古来伊勢神宮三節祭には、奉幣後外玉垣御門前で欄宜などは倭舞を奉仕し、その妻女は五節舞を舞い、神領の童子が鳥名子舞を舞う」という記述が見られる。同様に『神宮祭祀の研究』には、「古儀においては倭舞・柏酒・五節舞・鳥名子舞を含めた御遊がくりひろげられていた。すなわち荒祭宮の祭儀が進むと勅使・宮司以下は直会殿の座につき酒食の饗膳をかこみ、ふたたび中重に参入して倭舞をつとめ、酒立女から柏酒を受ける。さらに欄宜・内入の妻女の舞、斎宮女官の五節舞、荒木田本郷の風俗舞ともいうべき鳥名子舞へと引き継がれてゆく」という記述が見られる。

また、寛文六年六月三日（1667）鳥名子組から神宮への願書によると「神事五日前には火を清め矢野村の巫女がけがれを払い、前日には二見浦に泊まって沐浴潔斎して参宮の後神事を勤めた」という、神事までの一連の流れを記した文献も見られる。

廃止が通達される鳥名子舞終焉の時期に、実際にひよこを経験した森井三治郎は『神宮を中心としたる御神楽を偲ぶ座談会』の中で鳥名子として奉仕する際について以下のように述べている。

家では、三日許り前から特別の風呂をいらして戴き、親共に連れてもらひまして、仲間が十五六人と「宇仁館」に泊まることになって居ました。日が暮れると、神宮から誰かがお呼びになって、それから酉の刻（午後6時）前にずっと外宮へ参って、御

門前の左手の所に座らせて貰ひました。その前の鳥居（中重鳥居）の両側には、御禰宜さんが居られまして、色々と奥へ入つて行かれる方もありましたが、居られる人もありました。一時間許りするとお呼びになって、あの御門（内玉垣御門一名玉串御門）の側へいきます。四人の『ひよこ』（鳥名子舞幼童の俗称）が居まして、そして有體に云ひますと、四人がくるくる三回廻り、廻り終わって行違ひになり、かう鳥の真似と云ふのか、三度俯向きます。俯向くとき、ピーイー、ピーイー、ピーイーと笛を鳴らします。それを鳴らす人は、東原（東外城田村大字東原）の者であります。さうすると又立って、三回廻り、行違ひになり、三度禮をして、それからもう一遍同じ事をやり、都合三やつて、そして退つて参るのであります。

『神宮を中心としたる御神楽を偲ぶ座談会』より

森井は、鳥名子舞を奉納したのは二の御門（内玉垣御門、一名玉串御門）の前であったことを明言している。鳥名子舞は、16日に豊受大神宮、17日に皇大神宮で奉納されるのが昔からの慣例であった⁷⁾。

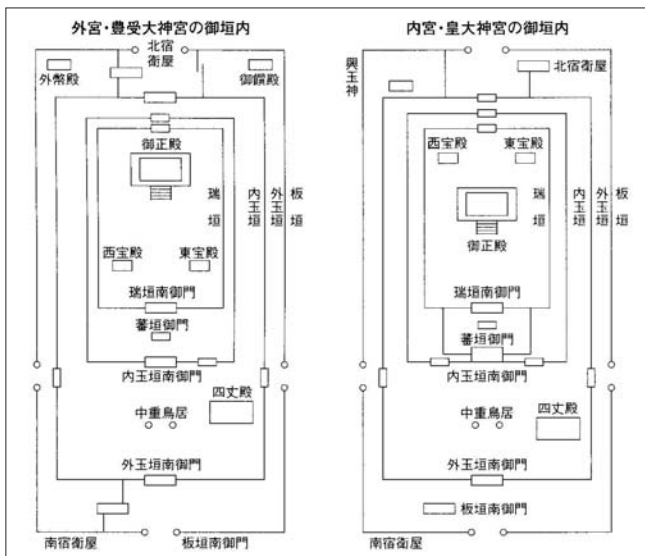


図1 外宮・内宮の御垣内⁶

4. 鳥名子舞の歌詞

舞歌については、時代によって変遷がみられる。以下は『皇大神宮年中行事』に採録されているものである。

酉の刻、瑞垣御門外側に参候して、以下六首の歌を奉納する。

志^し太^だ良^らう^うて^てと 父^てが^の宣^たへ^ば う^うち^ち（^{うち}打^ち）は^はん^べり 習^しひ^はん^べり
柏^あの^こ袖^{そで} 破^やれ^ては^はん^べり 帯^おに^のや^やせ^む 襷^{たす}に^のや^やせ^む い^いざ^ざせ^む
い^いざ^ざせ^む 鷹^{たか}の^の緒^おに^のせ^む
志^し太^だ良^ら 走^はり^うち 大^お津^つの^の浜^はへ^いか^ば 逢^あふ^もの^の買^かは^め 立^たち^ち漕^{そう}か^む率^{りつ}
志^し太^だ良^らは 米^{こめ}買^かは^ば 酒^{さけ}汲^ひみ^あげ^て盛^もれ 富^{とみ}の^の使^しぞ
池^い掘^ほれ^よ 蓮^はは^は我^{われ}植^うゑ^む 蓮^はが^のう^へに 並^な倉^{くら}建^たて^れら^れよ
い^いざ^ざ立^たちな^む 鴛^う鴦^{やう}の^の鴨^{かも}鳥^{とり} 水^みま^さら^ば 富^{とみ}に^のま^まさ^らむ

その後、斎王候殿と舞姫候殿の中間で以下の十二首が奉納される。

天^{あめ}な^なる^るや^や 雁^{かり}が^の中^なる^るや^や 我^{われ}人^にの^の子^こ さ^さあ^あれ^れど^ども^もや^や や
雁^{かり}が^の中^なる^るや^や 我^{われ}人^にの^の子^こ
道^{みち}の^のへ^への^の こ^こ橘^{たちばな}を^を ふ^ふさ^さ折^おり^り待^{まち}つ^は た^たが^が子^こな^なる^るら^らむ
遠^{とほ}江^え い^いな^なさ^さの^の山^{やま}の^の 椎^{えだ}が^の枝^{えだ}を^を ふ^ふさ^さ折^おり^り待^{まち}て は^はゐ^ゐま^まろ^ろも^もと^とる
い^いよ^よと^とぞ^ぞい^いふ 君^{きみ}が^の代^{しろ}は 千^ち代^{しろ}と^とぞ^ぞい^いふ 千^ち代^{しろ}と^とぞ^ぞい^いふ
紫^{むらさき}の^の帯^{おび}を^を垂^たれ^て い^いさ^さや^や遊^{あそ}ば^む
大^お宮^{みや}の^の 前^{まへ}の^の鹿^か簾^{すだれ} あ^あら^られ^れあ^あら^られ 我^{われ}が^の通^{とほ}へ^ば妻^{つま}も^も侍^{さむらい}ふ
大^お宮^{みや}の^の 前^{まへ}の^の河^かの^のご^{ごと} 河^かの^の長^{なが}さ 命^{いのち}も^も長^{なが}く 富^{とみ}も^もし^し給^{たま}へ
山^{やま}河^{がは}に 住^すむ^や 鴛^う鴦^{やう}の^のめ^め鳥^{とり} 汝^{まし}や^や こ^この^のよ^よに 七^な度^{なたび} 妻^{つま}ご^ごひ^ひや^やす^する
山^{やま}河^{がは}に 立^たて^る く^くろ^ろめ^めす^すこ^こめ ま^まさ^さふ^ふく^くや^や よ^よき^きこ^こに
手^てを^をと^とり^りか^かけ^て い^いさ^さや^や遊^{あそ}ば^む
み^みな^なみ^みな^な鳥^{とり}は 雁^{かり}に^のぞ^ぞあ^ある 霰^{あられ}ふ^ふり 霜^{しも}置^おく^く夜^よも 夜^よ床^{とこ}定^{さだ}め^めず

大川柳 葉広く立てる 大川柳 よきあ子に 手をとりにかけて
 いさや遊ばむ
 浜にいでて 遊ぶ千鳥 なぞあやもなき 小松が上に 綱なおかれそ
 橘が もとに道を踏みて かうばしや わが通へばぞ 妻も侍^{そろ}ふ

これらを歌舞した後「アマノオヒアマノオヒ」⁸ という呪言を三度唱える。

歌詞の意味についてここでは詳説しない。冒頭に現れる「しだら」とは手拍子のことである。そのことばの起源については定説がない。楽を設けると記す三河国の設楽（しだら）をかけあわせ、歌舞に関係したことに相違ないという解釈が文献⁹ には見られる。また最後の歌については、鴨に「倉を建てるから退きなさい」と呼びかけて終えている。これは、鳥名子舞を行う自分たちもこれで退出するという意味をかけており、舞の終わりを示唆している¹⁰。

なお安永（1772－81）から文化（1804－1818）を生きた柘宜中川経雅の随筆の中には鳥名子歌として「ヨキカコ（好箒）ニテ、オトリ（媒鳥）カケ（掛）テ、イサ（率）ヤアソハム（将遊）」という記録¹¹ が残されており、時代によって歌詞が変遷していることがわかる。

5. 舞 振 り

舞振りに関しては「3. 鳥名子舞の次第」の項でも多少触れた。具体的な動きとして『神宮諸雑事記』には「鳥名子等組手を廻した後頭を一所にあつめて伏し、その後起きて各手を合わせて退出する」と記されている¹²。また近世の舞振りとして「四人がくるくる三回廻り、廻り終わつて行違ひになり、かう鳥の真似と云ふのか、三度俯向きます。俯向くとき、ピーイー、ピーイー、ピーイーと笛を鳴らします」¹³ という記録が残されている。舞は、歌いながら舞ったのか歌の後に舞ったのか不明である。なお装束については、鳥名子の童子は、青色の水干に紫の帯を垂れ、鶏の冠をいただいた装束を身に付けていたという記録が残されている。

以下図2は、『神都名勝誌』に掲載された鳥名子舞の様子である。



図2 鳥名子舞が踊られている様子 『神都名勝誌』より

6. 鳥名子舞に用いられる音楽

舞振りや歌譜に関する記録は中世の時に失われた¹⁴。鳥名子舞は一時期断絶した後、近世に再興され明治時代に至ったといわれている。近世以降再興された歌詞に関しては記録がいくつか残されているものの、音の動きを表した音譜は残されていない。

鳥名子舞には、歌や笛、琴が付随していた。これらの音楽は、主に東原の土地のものが担当したといわれている。その楽器構成は弾琴2人、笛生2人、歌長2人というものである。しかし、時代によってその編成は多少異なっているであろう。因みにこの構成に伴われる舞は、童男童女18人である。弾琴と笛生を勤めるのは東原、歌長は野篠の長氏（中村家）が代々世襲していた¹⁵。

琴に関しては、^{とびのをのこと}鴉尾琴が用いられたことが記載されている。この楽器の名称は、琴頭が鳥の尾羽のように見えることに由来している。平安時代から神宮の神宝21種の一つに数えられており、神宮徴古館（三重県伊勢市）には現在、豊受大神宮へ昭和28年に調進し、平成5年に撤下された鴉尾御琴が展示されている。

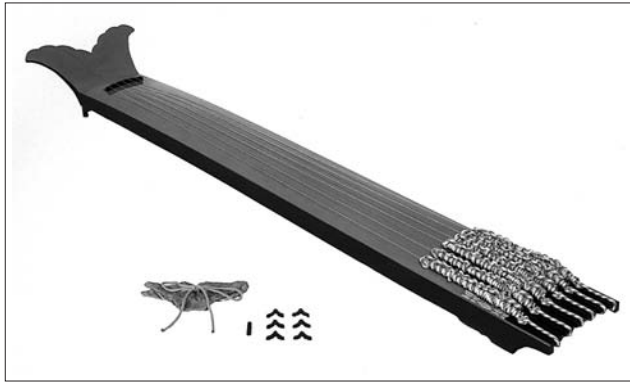


写真1 鶏尾御琴・琴柱・琴軋^{ことさき}¹⁶

中世の鳥名子舞で用いられた琴に関して「このことは、倭舞や五節の舞の時に用いた同じ琴で、忌火屋殿に置いて神聖視した呪力ある琴だ」¹⁷ という記述も見られる。

近代になると楽器の数は減少してきたのではなかろうか。その根拠は近年編まれた『神宮を中心としたる御神楽を偲ぶ座談会』の中に、笛以外の楽器について言及されていないことにある。前述したひよこ経験者の森井は、鳥名子舞で奏される楽器に関して、笛についてのみ発言している。時代の変遷により、持ち運びに不便な琴は用いられなくなっていったのかもしれない。また笛譜に関しても記録がない。笛を担当していた西野武市は座談会において「笛はほんの『三文笛』でして、大きな笛であるとピーピーという音が出ませんので、お恥ずかしいことですが、ピーとなる三文笛でした」と発言している。余談となるが、東原では笛生の地位は、他家よりも上位にあった。

当時、ひよこを経験した増田と笛を担当していた西野では、36歳の年の差が確認できる。したがって、舞は童男童女が担当していたが、笛に関しては大人が担当していたと考えられる。

おわりに

鳥名子舞は、歌詞や舞振りなど時代によってその形態を変えつつ、近年まで残った貴重な神事芸能といえよう。本稿では、現在資料も少なくなりつつある鳥名子舞に関して少しでも多くの人に、その存在を知ってもらいたいという願いを持って、その概要について述べた。

今後は、神宮で行われているさまざまな御神楽について研究を進めていきたい。

謝 辞

本稿を執筆するきっかけとなったのは、元伊勢神宮楽長東浦秀昭氏に笙の稽古を受けている時の世間話であった。その折、伊勢神宮においては現在奏されている雅楽の以前に、鳥名子舞という御神楽が奉納されていたことについて話があった。このような東浦氏との会話の中で、伊勢神宮の御神楽に関して様々な点が明らかとなってきた。本稿を執筆できたのは、東浦氏の助言が得られたおかげである。ここに記して感謝の意を述べたい。また、神宮文庫においては、様々な貴重書の閲覧を許された。ここに記して感謝したい。

註

- 1 中西正幸『神宮祭祀の研究』国書刊行会、2007、p49
- 2 この座談会は、昭和9年11月9～11日に開かれた「神宮関係御神楽資料展覧会（於：神宮文庫・三日市太夫邸）」にあわせて、同年11月9日に高千穂館において催された。
- 3 神宮神部署『神宮を中心としたる御神楽を偲ぶ座談会』宇治山田 神宮神部署、1935、p.7
- 4 掘田吉雄「今は亡い懐かしのフオクロア ― 鳥名子舞と伊勢御師 ―」『伊勢市の民俗』伊勢文化会議所、1988、p.776
- 5 金子延夫は『田丸合戦と鳥名子組』の中で、「ひよひよ神事」という名称を用いている。
- 6 南里空海『伊勢の神宮』世界文化社、2003、p.199

- 7 掘田吉雄, 同掲書, p.773
- 8 「アマノオビオビ」を3度唱えるという記録もある.
- 9 土橋寛『古代歌謠集』岩波書店, 1983, p.482
- 10 前掲書, p.483
- 11 金子延夫『玉城町史 第1巻 ―南伊勢の歴史と伝承―』三重県郷土資料刊行会, 1983, pp264-265
- 12 金子延夫『玉城史草 田丸合戦と鳥名子組』玉城郷土会, 1979, p.19
- 13 神宮神部署, 同掲書, p.6
- 14 中西正幸, 同掲書, p.49
- 15 弾琴と笛生を勤めるのは東原, 歌長は野篠^{おし}の長氏と記しているのは『玉城町史 第1巻 ―南伊勢の歴史と伝承―』である.『三重県 玉城町史上巻』『第2章古代 第6節伊勢神宮にかかわる事項』には,「東原の人は,歌長・弾琴・笛吹を勤めたのである」との記載が見られる.
- 16 『神宮御神宝図録』神宮徴古館農業館, 2008, p.59
神宮徴古館に展示されている鶏尾御琴は,長さ266.6cm,幅(最大)33.3cmである.琴本体は桧造で,面を朱漆,側・腹面は黒漆で塗り分けている.
琴柱は黒柿,琴軋は水牛の角で作られている.
- 17 掘田吉雄, 同掲書, p.70

参考文献

- 神宮司庁編『神宮年中行事大成 前篇』吉川弘文館, 2007
- 井上頼壽『神宮教養叢書第二集 伊勢信仰と民俗』神宮司廳教導部, 1955
- 中西正幸『神宮祭祀の研究』国書刊行会, 2007
- 神宮司廳編『皇學館大學創立百十周年・再興三十周年記念出版 神都名勝誌』
皇學館大学, 1992
- 神宮神部署『神宮を中心としたる御神楽を偲ぶ座談会』宇治山田 神宮神部署,
1935
- 土橋寛『古代歌謠集』岩波書店, 1983
- 伊勢民俗学会編『伊勢民俗』8巻1号, 伊勢民俗学会, 1968

掘田吉雄「今は亡い懐かしのフォクロア — 鳥名子舞と伊勢御師 —」『伊勢市の民俗』伊勢文化会議所，1988

金子延夫『玉城史草 田丸合戦と鳥名子組』玉城郷土会，1979

金子延夫『玉城町史 第1巻 — 南伊勢の歴史と伝承 —』三重県郷土資料刊行会，1983

伊藤裕偉『中世湾岸の湊津と地域構造』岩田書院，2007

三重県玉城町史編纂委員会編『三重県玉城町史 上巻』第一法規出版株式会社，1995